

松江市域における民藝運動の展開 ―出雲民藝紙と布志名焼を中心に―

吉儀 和平

1. 民藝運動とは

民藝運動の創始者であり指導者であった柳宗悦（1889～1961）は、大正時代の末から全国の工芸品調査を続けた。その中で、民衆的工芸を略した「民藝」という語が濱田庄司や河井寛次郎らとの相談で作られ、1926 年（昭和元）から民藝運動が本格化する。柳は言う。

民藝品は民間から生れ、主に民間で使われるもの。したがって作者は無名の職人であり、作物にも別に銘はありません。作られる数もはなはだ多く、価格もまた低く、用いられる場所も多くは家族の住む居間やまた台所。いわゆる「手廻り物」とか「勝手道具」とか呼ばれるものが多く、自然姿も質素であり頑丈であり、形も模様もしたがって単純になります。作る折の心の状態も極めて無心なのです。とりわけ美意識等から工夫されるものではありません。材料も天然物であり、それも多くはその土地の物質なのです。目的も皆実用品で、直接日々の生活に必要なものばかりなのです。制作の組織の多くは組合。これが民藝の世界なのです。

民藝の中にこそ工藝の美が、より安定に保証されている

美しさのために作った器よりも、用のために作った器のほうがさらに美しい

（資本主義の）商業主義は競争の結果、誤った機械主義と結合します。ここに創造の自由は失われ、すべてが機械的同質に落ちてゆきます。

一国の民藝はさらに地方的工芸に依存してきます。ですから地方的工芸の存在は重大な意義を有ってくるのです。地方こそは特殊な材料の所有者であり、また独特な伝統の保持者なのです。

（柳宗悦『民藝とは何か』1941 年刊）

2. 島根の民藝運動

島根県の民藝運動を主導した太田直行（1890～1984）は、次のように語っている。

民藝運動は今のところ未だ文化的領域を脱しない。我々の理想から言えば、一日も早くこれを産業的領域にまで到達させたいのであるが、現在の社会状態はすべての点においてあまりにも民藝の世界から離脱している。たといわずかの伝統に民藝が保存されていようとも、それらのものから現社会を動かすだけの力が出てくるとは想えない。それ故に我々は忍耐強い熱意をもって徐々に運動を進めて行かねばならぬ。何が正しい伝統なのか。刻々に滅びゆくものの中から、我々は少しでも早くその核心を把握し、その形態を記録して他日の用に備えておこう。

（太田直行『島根民藝録』緒言、1935 年刊）

当時松江商工会議所理事であった太田は、旧制松江中学の同窓である河井寛次郎から数年にわたって「正しい工藝」と「民藝」との関係を説かれ、その実物も示されて全く共鳴していたが、これを地方工藝でいかに実現していくか当惑していた。

偶然のきっかけから柳宗悦を招いて、1931年（昭和6）5月津和野から安来までの「島根工藝診察」の旅が始まる。県産工藝の全般にわたって健康診断をし、健康なもの、健康が回復できるもの、全く見込みがないもの、の三種に大別して、将来の指導方針を確立しようと試みたものであった。

柳は県下各地で作り手（工人）や一般の参加者に「正しい工藝」のあり方を訴え、県下の工人たちに予期された以上に大きな刺激をもたらした。さらに、太田は柳と河井寛次郎から県下の工藝に縁の近い国内外の参考品を60点借り、三か所で展覧会「正しい工藝の展観」を開催し一般に供した。工人たちにはそれを貸与して新作の制作に便宜を図った。

こうして太田の手によって民藝運動の種子が全県下にまき散らされた。

●その後の展開→【資料1】島根民藝年鑑（抄録）

●その特徴 →【資料2】太田直行による柳宗悦追悼記事

3. 松江からの参加者

この民藝運動の勃興期にあたり、現松江市域から参加した作り手（工人）は、布志名焼の舩木道忠、福間定義（出雲陶器会社、湯町窯）、袖師窯の尾野敏郎、岩坂紙の安部梅雄、安部榮四郎の5名である。それぞれが民藝運動から強い影響を受け、戦前戦後を独自に歩んできたので、その歩みを跡付けてみよう。

（1）布志名焼舩木窯

四代舩木道忠（1900～1963）— 舩木研兒（1927～2015）— 舩木伸児（1960～）

（2）布志名焼湯町窯

福間定義（1904～1989、戦後貴士に改名）— 福間琇士（1941～）—
福間庸介（1963～）

（3）袖師窯

三代尾野敏郎（1903～1995）— 尾野晋也（1940～2012）— 尾野友彦（1972～）

（4）出雲民藝紙

安部榮四郎（1902～1984）— 安部治夫（1919～1984）— 安部信一郎（1951～）

4. 松江美術工藝研究所（通称松江美術工藝学院）の開設

- ・ 1946 年（昭和 21）4 月～1948 年（昭和 23）3 月の 2 年間
- ・ 金津滋（染色工藝）、鈴木尚夫、藤本均の受講生 3 名が民藝運動の理念に確信を持った。
- ・ 多々納利雄（木工藝）、石村英一（漆工藝）、野津弥一郎（めのう細工）が続く。

5. 工藝と食の異業種交流グループ「MATSUE 流の会」の結成

1989 年（平成元）～

むすびに：手仕事の宝庫 松江・出雲地方

- ・ 江戸時代、雲州松江藩 6 代藩主・松平宗衍の延享の改革（1747 年～）と 7 代藩主・治郷の明和の改革（1767 年～）の成果 …木綿、鉄、薬用人参、ろうそく、鋳物、紙、畳表、布志名焼など
- ・ 明治の産業革命を経験しなかった松江 …手仕事が機械製品に駆逐される
- ・ 昭和初期からの民藝運動 …手仕事の復興運動
- ・ 松江には、今でも陶器・磁器・漆器・織物・和紙・木工・鉄器・銅器・来待石・表具・和菓子・日本酒・かまぼこ・蕎麦などの手仕事が広範に残っている
- ・ 松江の産業振興のあり方 …もう一度、手仕事を松江の産業振興の核に据える必要があるのではないか

【スライドリスト】

1. 民藝運動とは

- 1-1. 柳宗悦肖像（安部信一郎氏蔵アルバム）
- 1-2. 松江駅の柳宗悦とバーナード・リーチ、二度目の来松（同上蔵）
- 1-3. 河井寛次郎と太田直行（1948年11月10日、同上蔵）
前列左から河井、太田、安部榮四郎、後列左から村岡景夫、柳宗悦、安部治夫、安部梅雄

2. 島根の民藝運動

- 2-1. 太田直行著『島根民藝録』島根民藝会、1935年刊より 表紙、緒言、「島根民藝年鑑」
- 2-2. 太田直行肖像 『松江商工会議所四十年誌』1934年刊より（島根県立図書館郷土資料室蔵）
- 2-3. 皆美館における「民藝晚餐会」記事（『松陽新報』1931年8月6日、『大阪毎日新聞』1931年8月7日、松江皆美館蔵スクラップブック）
- 2-4. 同記事写真：左より柳宗悦、河井寛次郎、大島（県商工課長）、原本虎一郎、金子（工業試験場長）
- 2-5. 大阪南海高島屋の「山陰民藝展」会場（安部信一郎氏蔵アルバム）
- 2-6. 同上
- 2-7. 湯町窯で作陶するバーナード・リーチ（同上蔵）
- 2-8. 皆美館でのバーナード・リーチ送別会（1953年6月、同上蔵）
- 2-9. 『民藝』41号、日本民藝館、1956年5月刊（島根県立図書館郷土資料室蔵）
- 2-10. 同上掲載、座談会「島根民芸のあゆみー松江宍道湖畔皆美館にてー」
- 2-11. 同座談会挿図写真：左より安部榮四郎、船木道忠、太田直行、尾野敏郎、福岡定義

3. 松江からの参加者（4）出雲民藝紙

- 3-1. 「貿易と観光博覧会」に出展する安部榮四郎（1948年9月16日、安部信一郎氏蔵アルバム）
- 3-2. 島根県八束郡岩坂村別所（1932年6月、同上蔵）
- 3-3. 出雲国製紙伝習所（同上蔵）
- 3-4. 島根県工業試験場紙業部（同上蔵）
- 3-5. 安部宅を訪問する柳宗悦、濱田庄司ら（1932年6月9日、同上蔵）
- 3-6. 安部宅紙漉き場でのバーナード・リーチ（同上蔵）
- 3-7. 同上

4. 松江美術工藝研究所（通称松江美術工藝学院）の開設

- 4-1. 平本映子監修『知られざる「松江美術工芸研究所」の世界』島根県文化振興財団、2003年刊

5. 工芸と食の異業種交流グループ「MATSUE 流の会」の結成

- 5-1. 「MATSUE 流の会 秋の展示会」チラシ（2006年9月）
- 5-2. 展示会出展と視察①「モノ・ジャパン」、オランダ・アムステルダムスのロイドホテル（2015年2月）
- 5-3. 展示会出展と視察②世界最大の生活用品見本市「アンビエンテ」、ドイツ・フランクフルトのメッセ・フランクフルト（2015年2月）